

# 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境

## 3 訓練環境と訓練効果の関連

野口 宗雄 教育科学講座

キーワード 臨床動作法 訓練会 訓練効果 訓練環境 心身障害児

はじめに

人間をとりまき、それと相互作用を及ぼし合うものとしてみた外界を環境とすると、訓練環境とは一定の目標に到達させるための実践的教育活動において、学習者と相互作用を及ぼし合うものとしてみた外界をさすことになる。それは主として社会的環境ということになり、学習者自身、親、兄弟、祖父母等の家族、大人、友人、訓練仲間、学校、教師、施設、医療従事者（PT OT ST 等を含む）がその対象になる。

本稿では長期にわたって行ってきた心身障害児に対する心理リハビリテーションによる動作法の訓練経過と訓練環境との関連について、どのような訓練環境が訓練効果をもたらし、子どものもっている可能性を發揮させる要因であるかを、13の事例ごとに検討することを目的とする。

1 トレーニー A（男児 インテーク時1歳7月、現在16歳11ヶ月）

診断名 脳性マヒ

**動作・行動の特徴と訓練目標** 上体を大きく前屈して保持している坐位姿勢を、上体を直にして保持できる。膝立ちを腰を入れ、上体を直にして姿勢が保持できる。反張している膝を弛め、腰を入れ上体をタテて立位姿勢が保持できることが目標。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 3歳から6歳まで坐位での形作りの訓練を中心に行って、背中を伸ばす動きができた。更に直の姿勢保持の課題に進み、少しずつ直に近い形で保持ができるようになってきた。6歳で腰を補助するだけで姿勢が保持できるようになる。9歳から10歳を境にして、かたさが目立つようになり、坐位で背中が前に折れ、腰が引け、腹を反らすようになる。また、背中に左凸の歪みが見られるようになる。13歳から再度、膝立ちの姿勢保持へと移った。17歳を補助するだけで姿勢が作れるようになってきた。立位での腰と膝はかたく、それ以上に伸びない状態である。

2) **情緒・行動の変化** 訓練会への参加当初は母子分離ができていないで訓練中は泣き通しであった。持続的に参加するなかで訓練意欲を示すようになる。11歳で情緒が不安定になる。心の緊張が身体に直接現われる特徴を持っていることから、身体のかたさが目立ってくる。母親がトレーナーになって仲間と家庭で訓練を始めたこと、父親の参加や協力が増えたことに等によって、家族の中で尊重されていると感じ、情緒的に安定した。心の緊張が軽減するに伴って、身体のかたさも統制できるようになってきた。

### (2) 訓練環境

1歳半のころ動作法の考え方と訓練方法に興味を抱いて訓練会に参加するようになった。訓練をしてもらえる環境があると思い肢体不自由養護学校に入学した。入学当初は養護・訓練（現在の自立活動）の時間があって訓練をしてもらえたが、その後は訓練の時間として組み込んでもらえなくなった。入学後まもなく整形外科的な手術の話があったが、これからの成長に伴う体の変調があることを思っ

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

訓練会には休むことなく参加し、順調に効果があらわれ直に近い形で坐位が保持できるようになった。10歳から11歳を境に身体がかたくなってきた。10歳には入院が、11歳にはそれまで参加し続けてきたキャンプに欠席した。キャンプ中に身内の法事があることが不参加の理由であった。トレーニーは学習の場が奪われただけでなく、自分の意思に関係なく身体に力が入ってしまい、自力でそれを抜くことができない状態に追い込まれた。参加を希望していたトレーニーの意思に反して、保護者の一時的な感情や気のゆるみによって不参加が決断されたようだ。その後訓練環境を整備することで13歳からは再度膝立ちで腰を入れる動きが出て少ない補助で保持できた。立位での膝と股関節を自分で弛め、姿勢の保持が課題である。

## 2 トレーニー B (女児 インテーク時 4 歳 10 ヶ月、現在 19 歳 6 ヶ月)

**診断名** 精神発達遅滞

**動作・行動の特徴と訓練目標** 腹を突き出し、背中を反らせ、脚を反張気味にし、つま先を反らせて地面から浮かせて歩く。立位姿勢も反張で両脚を開き気味にして、肘を折り肩でバランスを取って保っている。片膝立ちはできない。慢性的に入っている背中を力を緩めて伸ばし、腰を入れて坐位姿勢を保つことが当面の課題である。言語は少し理解できる。牛の絵を見て「もーもー」と発語する。

### (1) 訓練経過

**1) 動作の変化** 6歳の時には坐位で背中の丸みが少なくなり、膝立ちと立位姿勢では背中の反りが少なくなった。10歳ではさらに背中が伸び、膝立ちの姿勢がとれるようになった。11歳になると、逆に坐位で胸を張ることが目立ってくる。立位姿勢は、踵で踏んで足の指が上がってしまい、つま先で踏みしめられない。13歳になると、坐位での胸の張りが収まり、立位で膝を少し曲げられるようになった。足の前の方で少し踏みしめられるようになってきた。13歳から14歳では、坐位と膝立ちで腰が引け背中の反りが強くなり、訓練への抵抗が強まっている。15歳から17歳では躯幹のひねりと坐位の課題が主になっている。肩の力や腰の引けは残っているが、腹を突きだし背中を反らせることが減り、腕が下ろせるようになってきた。18歳では坐位ですっきり坐ってられるようになり、立位では足の裏で踏みしめられるようになった。

**2) 情緒・行動の変化** 当初訓練中泣いて力を入れることが多く、課題に取り組むことに抵抗を示した。10歳までは頑張ろうとする意欲が見られ、援助に合わせて身体を動かすことができた。11歳のころトレーナーを叩いたり、髪の毛を引っ張ったりする行動が現われ、訓練課題に取り組めないことが続いた。胸を張るなど背中の反りが顕著になってきた。14歳で、興奮気味の時と落ちついている時との感情の落差が大きく、まだ課題を受け入れて訓練に取り組めないことも見られた。19歳の4月から通所が変わり、新しい場所での人間関係や仕事になれる課題が加わったことで不安定になり、訓練会では担当の女性トレーナーの髪を引っ張ったり、叩いたりする行動が見られた。

### (2) 訓練環境

月例会には5歳から出席した。6歳から8歳の間は欠席が多かった。また、参加はするが早引けしたことも数回あった。またキャンプは8歳の時は参加しなかった。この頃は親の意欲が減退し、迷ったり、悩んでいた時期である。7歳で養護学校に入学し、13歳で中学部にすすんだ。寄宿舎で週2泊3日を2回とる形を取り、下校は路線バスを使った。母親は子どもが自分の見えないところにいることに不安を感じた。16歳で高等部にすすむ。訓練環境検討後、自分でできる、できないに関わらず、子どもが自分でやろうとする気持ちを伸ばす方針をとった。卒業後は自宅近くの作業所に通っている。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

子どもの面倒は主として母親が見てきた。初めての子どもが障害児であったことから、必要以上に手がかけられ、できることまでやってもらえたことから、人にやってもらえるのが当たり前とする態度を身につけてしまった。15歳頃から落ち着いて訓練に取り組めるようになり、腰を引いたり、背を反らせたりすることも減少してきた。17歳の時の訓練環境検討会で、子ども2人に両親と祖父母4人の、大人が多い家庭環境による過保護的な対応を見直すことと父親の訓練会等への参加が提案された。父親が月例会に参加するようになり、両親の姉弟の養育へのかかわりが増えた。「できることは自分でするようにしたい、入所は良い機会としていろいろな事を経験させたい」と対応の仕方にも変化が見られるようになった。18歳までは訓練場面で新しい課題に対する抵抗感を示しつつも、声をかけると自分で姿勢を取り課題に落ち着いて取り組んでいた。

## 3 トレーニー C (男児 インテーク時4歳1ヶ月、現在17歳9ヶ月)

**診断名** 精神発達遅滞

**動作・行動の特徴と訓練目標** 立位姿勢を自分で保持することができず、腰の補助が必要であった。

つかまり立ちを一人ですることもあったが、両脚を開いて保持していた。膝立ちは両脚を大きく開いて何とか姿勢を保持している。立位は腰の補助が必要であった。膝立ち、片膝立ち、立位で背中を伸ばし、顎を引き、腰を入れ、上体を伸ばして直の姿勢を保つことを目標とした。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 3歳半で歩き始める。7歳では、自分で少し背中を伸ばせるようになり、腰も入るようになってきた。膝立ちと立位で若干尻が引けて、腹を突きだしている。立位では、膝が少し反張していた。12歳の時、膝立ちで腹が前に出て、右脚が外側に出ているが、直に近い姿勢を保持できた。腹を少し突きだす程度で保持できている。14歳の時には、片膝立ちでほぼ直に近い姿勢をとれるようになった。17歳では、膝立ちと立位姿勢で背中に左凸の歪みが見られる。

2) **情緒・行動の変化** 最初泣いてパニックを起こし、訓練課題になかなか取り組めなかった。6歳頃までは、キャンプに不参加だったり、月例会に出席しても発熱のため訓練に集中できずに、じっくりと訓練に取り組むことができなかった。7歳では、トレーナーの声がけで自分から膝立ちの姿勢をとるようになり、課題にも取り組めるようになってきた。12歳では片膝立ちで涙を浮かべながら必死で姿勢を保持しようとする姿も見られ、訓練の意欲が高まってきた。17歳では集中して訓練に取り組めるようになって訓練内容が増えてきた。

### (2) 訓練環境

3歳の時、市の母子通園施設に通い、動作法の訓練を受ける。膝立ちでの関節運動が中心の訓練内容になる。4歳で隣市の保育園に入園する。6歳で地元の保育園に入園し、友達との関わりの中で言葉も増え、いろいろな経験ができた。7歳で養護学校に入学し、6年生の時は路線バスで通学する。13歳から中学部に入り寄宿舎生活をする。16歳で高等部にすすむ。現在も寄宿舎生活を行っている。

トレーニーBの弟で、姉弟2人に保護者一人が同伴する形態をとって、子ども1人に保護者一人がついてきた。訓練環境検討会の後、家族の話し合いで弟には父親がついて参加するようになった。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

7歳から訓練会に休まず参加し、訓練への意欲が高まってきたのに伴い、片膝立ちの形作りや坐位での背反らせが加わってきた。トレーナーが補助の多いかかわりをするとう体重を預けてきて自分で姿勢を保持しようとしないので、自分で姿勢を保持する構えを作ると同時にトレーナーがやれるんだという態

度を示すことによって訓練に集中できるようになった。15歳の時から父親が訓練会に参加するようになって子どもへのかかわりが増え、また家庭での訓練に取り組むようになった。そのことがトレーニーの情緒の安定と訓練課題への集中につながった。

#### 4 トレーニー D (男児 インテーク時5歳0ヶ月,現在18歳6ヶ月)

**診断名** 脳性マヒ

**動作・行動の特徴と訓練目標** 背中が曲がり,頭が下がり,前のめりになってしまい,自分では坐位姿勢が保持できない。坐位,膝立ち,立位,歩行が自分でできることを目指して,当面は主体的に訓練課題に取り組み,坐位姿勢の保持から膝立ちに向けての訓練を行う。

##### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 7歳では腕で上体を支えて坐位姿勢を保つ。膝立ちは腰が引け,腹が出る。立位は膝が内転し,踵が上がる。10歳で坐位姿勢が保持できるようになるが,上体に右凸の側湾があって右に傾く。膝立ちは上体が前後左右に動いてしまい不安定である。12歳では腰が入らない,膝が伸びきらない。13歳で身体のかたさが進行し,身体の歪みや腰,膝,足首のかたさが目立ち始める。なかでも膝のかたさが顕著で,伸びなくなってしまった。緊張が進まないように予防的な意味での弛めが訓練が中心となった。15歳で腰の動きが出る。膝立ち姿勢をごく短時間であれば一人で保持することができるなど,自分の身体をコントロールする能力が高まってきた。18歳で腰が左に流れ,左肩があがる。肩などを少し補助する程度で腰を入れ,上体を伸ばしてられる。

##### 2) 情緒・行動の変化

5歳の参加当初から小学生までは,訓練中絶えずめそめそと泣いていた。9歳頃から次第に身体のコントロール能力が高まるにつれ意欲的になり訓練も進歩が見られた。立位・歩行訓練に取り組める期待も抱かせた。13歳では意欲的に訓練に取り組むようになったが,身体のゆがみと関節のかたさが目立ち,膝に顕著だった。がちとしたかたさである。この時期は膝や足首,腰などのかたくなった部分を弛めことに重点がおかれるようになった。15歳で集団の中で意欲的に活動する点も目立ってきた。

##### (2) 訓練環境

4歳の時キャンプに初めて参加する。参加当初は休むことが多かった。母親の体調がおもわしくなかったこと,育児があるという理由であった。7歳の時肢体不自由養護学校に入学した。参加を続けて少しずつやる気がでてきた9歳の時,妹が生まれセンターに一時入所する。13歳で中学部入学にともなって自宅通学からセンターに入所し,そこから学校に通う形態をとった。月例会は欠席が多かった。施設と学校では車椅子での生活になり,学校での訓練の時間は減少した。16歳で高等部入学する。更に19歳で高等部を卒業し,自宅から施設へ通所が始まる。

##### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

訓練会参加当初は,トレーナーが働きかけても主体的に取り組む姿勢が見られず,思うような成果が挙がらなかった。9歳頃から課題に対して主体的に取り組む姿勢が見られるようになったが,母の出産によって2年続けてキャンプに参加できなかった。更に中学部進学時にあわせてセンターへの入所によって,意欲的で活動的になったものの,訓練の機会が減ってしまい,背中の歪みと下肢の緊張が強まり,タテ方向に動かす訓練より弛めの訓練が中心になった。

#### 5 トレーニー E (男児 インテーク時3歳6ヶ月,現在17歳1ヶ月)

**診断名** 脳性マヒ

**動作・行動の特徴と訓練目標** 自分で立って歩いているが、右足が尖足気味で内に入ってしまう。右脚をつっかい棒にしている。立位姿勢は左脚を外に開き、足裏全体が床につかないで、踵から下の部分だけを接地させ、反対の脚は棒のように突っ張って保っている。立位・歩行の安定と自分の力を発揮できることが目標である。言語に遅れはあったものの、言葉で自分の意思が表出できる。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 8歳での立位は右足の踵が上がりつま先立ちになる。12歳で左足首が外側にひねるように変形し、足の裏が床につかない。14歳で左脚を外に開き、右脚が棒のように突っ張っている。16歳で左足の踵を補助で押さえて、腰を補助して左脚に体重を移すと踏みしめられるようになる。立位では左足首がかたく、踵が浮いている。左足外側を接地させている。股関節はかたい。左脚で十分踏みしめることが難しく、歩行は不安定になりやすい。16歳以降は、膝立ちと立位での踏みしめ、左足首の弛めを行っている。膝立ちでは、腰を入れての踏みしめが左右ともうまくできるようになってきた。立位でも腰や足首を補助すれば左脚に乗れるようになった。

### 2) 情緒・行動の変化

3歳の初めてのキャンプでは、「おかあちゃん、おかあちゃん」と言い続け、親を探し求め大泣きして訓練にはほとんど入れなかった。小・中学校の時は、自分の意思を自由に表出できなくて、乱暴な言葉を使ってコミュニケーションを取ったり、相手を叩くなどの暴力的な関わりをしていた。

### (2) 訓練環境

誕生後言語と運動面に障害がでるかも知れないと言われ、5ヶ月から訓練を始めた。3歳6ヶ月で初めてキャンプ参加したが、その後しばらく参加することはなかった。月例会には5歳から参加したが、欠席が多かった。弟の出生、育児、義母死亡、自宅新築、病気（水疱瘡）等々の理由での不参加である。訓練会に参加しているが、学校の問題、親の迷い、トレーニーの訓練意欲の低さ等でトレーナーと同一歩調で訓練に取り組めず、思っていたような効果をあげることができなかった。16歳で養護学校高等部に入学し、同時に寄宿舎での生活が始まった。新しい環境でのびのびとした生活ができ、新しいことに挑戦できる機会が得られるようになった。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

小・中学校は地元の学校に入学し、特殊学級で学んだ。入学の可否、校長の考え、担任の対応等の問題で学校と家庭の間に軋轢があつて、子どもが思ったように受け入れてもらえなかった。そのことは子どもが生き生きした生活を送り、力を発揮することをできなくしていた。10歳ころから乱暴な言動が見られるようになり、同時に人前での挨拶や発表もできなかった。訓練では自分から姿勢をとったり、動かしたりする姿がある反面、きつい課題になると姿勢を崩したり、拒否的な行動をとったりすることが多かった。否定的に評価されることに過敏であった。努力が認められたり、誉められたりすると意欲的に取り組むことができ、集団活動などでは挨拶や他者とのやりとりができることが多くなった。11歳から再度キャンプに参加するようになり、きつい課題にも取り組めるようになった。12歳で養護学校に入学したころから乱暴な言動は減り、挨拶ができたことや他者とのやりとりが円滑にできるようになった。

## 6 トレーニー F (男児 インテーク時1歳9ヶ月、現在15歳3ヶ月)

**診断名** 脳梁欠損症

**動作・行動の特徴と訓練目標** 自閉的傾向と多動。こだわり。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 2歳で四つ這い、伝い歩きを始め、10歩程度歩く。坐位は腰が退け、背中が曲って、左へ

の側湾が見られる。身体に触れられると強く抵抗する。トレーナーとの関わりがもちにくい。唯一膝立ち姿勢だけは一応形が作れ、訓練らしいことができた。4歳では踏みしめる感じがなく、腹を突き出して歩く。膝立ちは腰が左右にふらつき、右方向に腰が流れ姿勢がとれない。9歳で補助なしで姿勢がとれる。また背中を丸めて立位姿勢を保持している。

2) **情緒・行動の変化** 2歳から5歳までは周囲の人との関係が作りやすく、泣いて抵抗したり、逃げだそうとすることが多かった。人や物に無関心で、周囲の状況と関係なく動き回る。好き嫌いが激しく、潔癖性で自分の手で土にも触れようとしない。「ナンナン」等の喃語は発するが、人とのやり取りに使われることはない。6歳ころから自分の興味ややりたいことにこだわりを示すようになる。受け入れられないと大声を出してぐずったり、叩いたり、噛みついたりする。9歳頃からは、落ち着き意欲を持って訓練に臨めるようになってきたが、親子関係や環境の変化によってこだわりがひどくなることが多い。

## (2) 訓練環境

1歳9ヶ月でキャンプに参加する。母親を愛着の対象にしていなかったが、キャンプ後から安全の基地として認識しはじめた。母親もそれによって自分はこの子の母親なんだという自覚が持てるようになった。5歳の時、父親の転勤で転居する。7歳で養護学校に入学する。月例会の出席は不定期的である。9歳頃からは訓練に対する意欲が出てきた。13歳で中等部にすすむ。キャンプに初参加以来8歳の時に弟の出生のために1回休んだほかは現在まで継続して参加している。環境の変化が頻繁で、転居、弟出生、父親の起業による家庭の混乱、交通事故等は本人の問題行動に直接影響を及ぼしているように思われる。また親の対応のよしあしが訓練態度や対人関係等に影響し、こだわりや情緒の不安定の誘因の一つになっていると思われる。

## (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

両膝立ちでの関節運動を、以前は反射的に動かしていたが、トレーナーの指示に合わせてゆっくり動かせるようになってきた。長年の訓練の積み重ねから動作や行動の変化は着実に見られている。しかしキャンプの開会式や閉会式、インテーク時等、母親が同席する場面ではこだわりを見せることが多い。こだわりが阻止されるとトレーナーに噛みついたり、近くにいる人に掴みかかっていたりすることがある。「様々なトレーナーやトレーニーとより良い関係作りができるようになる」「自分自身の体の使い方を知る」「自分の気持ちをうまくコントロールできるようになる」等を目標としている。

## 7 トレーニー G (男児 インテーク時 8歳 10ヶ月, 現在 21歳 9ヶ月)

**診断名** 自閉症

**動作・行動の特徴と訓練目標** 自閉傾向が強く、人とのかかわりをもとうとしない。動作法による訓練を通してコミュニケーションがとれるようになる。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 月例会に初めて参加した9歳での立位・膝立ち姿勢は腰が引け、腹がでていいる。立位は、左脚が反張で両脚を開いている。10歳の時初めてキャンプに参加し、膝立ち課題に取り組める。中学部にすすんでからは膝立ちや立位の姿勢をとることができなくなっている。15歳で訓練課題の中心が腕上げになった。訓練では簡単な指示を受け入れたり、他のトレーニーに関わっていったりする姿も見られた。18歳では、ブロックをしなくても勝手に体を動かすことは減り、上体の反りも改善されつつある。21歳のキャンプでは立位で腕を下ろし、両脚の開きも目立たない姿勢で保持できた。

2) **情緒・行動の変化** 当初訓練姿勢をとることに抵抗し、トレーナーのブロックがないと動いたり、逃げだしたりした。11歳で声掛けで自分から姿勢をとり、課題がわかるとトレーナーの指示と一緒に身

体を動かすようになった。中学部に進学した頃は、訓練に集中できないことが多く、姿勢を取るのが困難であった。寄宿舎をでて自宅に戻った時期でもある。16歳で高等部へ進学する。環境の変化にも関わらず、それほど情緒不安定にならなかった。自分から訓練室に移動したり、腕上げ姿勢をとって、少ない補助で指示に従った動作ができるなど、課題に取り組めるようになった。18歳では動かす部位に意識が向くようになり、トレーナーとも視線が合うことが多くなった。自傷行動や、食べない、寝ない、動き回る等の行動が激減し、言葉はないが身体を通してコミュニケーションがとれるようになった。

## (2) 訓練環境

7歳で養護学校に入学する。9歳の時から月例会に参加する。10歳の時キャンプに初めて参加する。食べない、寝ない、動き回る等の行動が多かったが、帰宅後家族に「違う子みたい」と言われ、キャンプを経験することで何かが変わったことを母親は気づいた。偏食の矯正、生活のリズムを作る、排泄、着衣の確立を期待して11歳から寄宿舎生活が始まる。13歳で中学部に、16歳で高等部に進学する。高等部卒業後学舎に通うようになったが、キャンプを経験したことが自信になっているようで適応した生活を送っている。施設に母親が出かけ動作法の訓練を行っている。

## (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

訓練会参加当初は、訓練に激しく抵抗し、頬叩き等の自傷行為も目立った。また、母親にくっついて離れない姿も見られた。その後、訓練会の雰囲気慣れ、寄宿舎に入って生活のリズムが安定し、自傷行動等は減った。訓練場面でも視線が合うことや自分から姿勢をとることが増え、立位や膝立ちの課題に取り組んでいる。課題の中心が立位から、膝立ち、腕上げへと変わってきているが、訓練によってトレーナーとマン・ツー・マンでやりとりができ、意味のあるかかわりを確保できていると思われる。動作の課題を通してコミュニケーションをとる、心を落ち着かせるというところに中心がおかれている。毎朝学舎に出かける用意を自分から進んでするなど、主体的に行動することも見られるようになった。

## 8 トレーニー H (女兒 初診時4歳11ヶ月、現在17歳10ヶ月)

### 診断名 脳性マヒ

**動作・行動の特徴と訓練目標** 坐位で背中が大きく曲がり猫背になり、膝立ちは腰が引け、背中が丸くなる。立位も腰が引け、腹部を突き出して背中が反った姿勢である。机などの物につかまって立ったり、伝い歩きはできるが、自分では膝立ち、立位、歩行ができない。親が見えると泣き出すなど、年齢に比べて幼い行動が頻繁に見られる。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 5歳で、はいはいができる。キャンプに初参加の7歳の時に、少ない援助で膝立ちが保持できるようになった。その後膝立ちの姿勢をとるのに補助が増えたり、行動面での後退が見られた。5歳から8歳の間の移動は、はいはいと車椅子でしていたが、9歳で歩行器を使うようになった。11歳の時、膝立ちと立位で腰が大きく引けたままであった。再びキャンプに参加した12歳から腰の援助に合わせて動かしたり、自分で動かそうとすることが増え、膝立ちや立位がわずかな補助でとれるようになった。13歳でつかまり立ちが多くなった。14歳で自力歩行を始める。一人歩きができるようになってから長い距離を歩いたり、椅子に坐った姿勢から立ち上がったりの動作が見られるようになった。

2) **情緒・行動の変化** できることまで家族が世話をしてしまい、もっている能力を伸ばしきれていない。過保護な対応によって本人の甘えとなってしまう、精神的にも幼い。歩けるようになると外部への興味関心が増し、自分からそれに近づいて行き、接触するようになった。

### (2) 訓練環境

病院でボイタ法の訓練を行った。1歳と2歳では医療福祉センターに母子入所した。また月1回の通所による訓練も行った。よいと思われる訓練があると聞けば何でもやってみようとした。4歳から動作法の訓練会に参加した。キャンプには7歳の時に母親と初めて参加した。その後、理由が明らかにされることがないまま参加することはなかった。それまでの5年間は欠席が多かった。11歳から母親に代わって父親が訓練会に参加しはじめた。それ以降は欠席することがほとんどなくなった。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

初めは母親が参加していたが、子どもが11歳になった時から父親が参加するようになった。父親は、機械的に体を動かしたり、道具の扱いが上手になるような方法とは違い、体で伝えてもらって子どもが自分で自分の身体の動かしかたを学習する方法であると聞き、理にかなった方法だと思った。12歳の時、訓練をするには今が最適であるというSVの説得によってキャンプに参加してから一人で歩けるようになった。安定した立位と歩行を目指している。

## 9 トレーニー I (男児 初診時6歳9ヶ月,現在18歳7ヶ月)

診断名 小脳低形成

動作・行動の特徴と訓練目標 腰が引け、背が丸まり、顎をつきだして坐位姿勢を保持している。膝立ちと立位は一人ではできない。訓練会では泣いたり、大騒ぎをして訓練課題に取り組めない。指示されたり、規正されることを嫌い、思い通りにならないと泣いたり、騒いだりして我を通そうとする。集団活動の場面では一人で周囲を這い回っていることが多く、活動に参加できない。人の話は理解し、言葉で自分の意思表出をする。

### (1) 訓練経過

1) 動作の変化 児童期までは身体に歪みがほとんど見られなかった。9歳で背筋が伸び、直に近い形で坐位が保持できた。10歳で自力で腰を入れて膝立ちが保持できるようになり、更に膝と腰を使ってバランスを保ちながら立位姿勢を保持することが可能になった。12歳から13歳にかけて腰、股関節、膝、足首がかたくなる。身体のかたさが強まり訓練が追いつかなくなる。股関節のかたさが目立ち、坐位では、背中が丸くなり、腰が落ちてしまう。膝立ちでは、両脚を開いて立ち、尻が引け、背中が反る姿勢になった。立位では両足首にかたさが見られ、内反し、尻が大きく引け、膝が伸びなくなって自分で保持することができなくなった。その後、右足首の内転、内反が顕著に見られるようになってきた。

2) 情緒・行動の変化 月例会参加当初の7歳では、訓練に集中せず、騒いだり、泣いたりして強く抵抗し、ヒステリックな行動を示した。自分で身体を制御できるようになるにつれて感情の抑制もできるようになり、集団での活動にも少しずつ参加できるようになっていった。その後、徐々に訓練にも集中できるようにもなった。しかし、ヒステリックな行動は相変わらず見られた。12歳から14歳にかけての訓練では、再度泣いたり、騒いだりして強い抵抗を示した。また、訓練意欲に乏しく、訓練に気持ちが向かなかった。集団活動では、逸脱行動が頻繁に見られた。15歳以降は情緒的に落ち着き、訓練に取り組み、集団活動でもみんなと活動をともにできるようになった。

### (2) 訓練環境

母親は子どものできることまで手をかけ、指示する一方、子どもが自分の要求が通らないとパニックを起こし、ヒステリックな行動を示すと最終的には本人の言うなりになってしまっていることが多かった。12歳から知的な面を伸ばしたいという親の希望から、自宅から離れた施設併設の養護学校に転校し、親元を離れての生活が始まる。そこではクラッチ歩行、車椅子の生活が中心となる。また、家族から離れての入所生活によって情緒的に不安定になった。この間月例会は欠席することが多かつ



た。また 12 歳のキャンプも白内障の手術とセンター入所等の理由で参加できなかった。この時期は身体の成長が始まり、身長とともに体重が増加して、身体全体が大きくなる反面、下肢で上体を支えることができなくなり、脚にねじれや変形が目立ってきた。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

自宅から養護学校に通学し、訓練会にも継続して参加していた頃に、膝立ちと立位姿勢が自分で保持できるようになった。念願の一人歩きが見えてきた。しかし立位姿勢が保持できる段階に到達したものの、身体を一本棒して、タテの方向に力を入れ、腰と膝で何とか上体を保持している状態であった。歩行につなげるには持続的な訓練が必要であった。その頃、家族に動作ができるようになるのは当たり前という考えがあり、身体の自立より学習面を向上させたいという願いが派生した。転校及び手術をした時期は、身体の成長が始まり、姿勢が悪化した時期と重なる。環境の変化によってこの時期は訓練会に思うように参加できなかった。動作が後退し、足首に内転・内反が生じてしまい、自分で膝で立っていることも困難になってしまった。情緒的に不安定になり、退行的な行動が見られた。学校生活も落ち着かず、情緒的に不安定だった。転校の背景は、家庭の意向が強く働き、高い目標が課せられ、新しい環境に適応できなくなった子どもは情緒の混乱を招き、それが動作に影響を与えたことが考えられる。

## 10 トレーニー J (女児 インテーク時 4 歳 1 ヶ月、現在 14 歳 8 ヶ月)

**診断名** 小頭症 脳性マヒ

**動作・行動の特徴と訓練目標** 寝たきり。股関節がかたく、折ることができずに、腕で上体を支えて坐位をとろうとするが、頸と上体が前に倒れて保持できない。言語による表出手段をもたないトレーニーは泣くことによって全ての意思表示をする。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 4 歳では股関節が少しずつ弛むようになり、腰を起すことができるようになった。姿勢が作れた時にトレーナーと目が合うなど、身体的な関わりで意思の疎通を図っていることが感じられた。10 歳から坐位で右に凸の側湾が目立つようになってきた。14 歳での坐位は右に側湾があり、右後ろが曲がり、左側は腹から胸にかけて大きく反り、左胸の下の部分が出っ張る。頸は安定しないが、顔は左を向けていることが多い。「頭を上げて」の言語指示で自分で顔を上げてくるような動きがでてきた。胸を前の方から、背中を後ろから押すように補助して姿勢をとらせた。膝立ちは、左腰が上がるために左脚がやや浮き気味になる。腰が大きく引け、左側に流れ、自分で保持することは難しい。上体と骨盤のねじれが大きく、股関節を開く方向に弛めることが困難になっている。

2) **情緒・行動の変化** 訓練に入るとすぐ泣き、状況に関係のない泣きを頻発し、訓練に抵抗を示した。訓練中は泣くことだけだったが、辛い時にだけ泣くようにその内容が徐々に変化してきた。トレーナーのかかわり方や課題が的確に伝わると泣くことが少ないことが分かってきた。月例会の訓練では、トレーナーの働きかけを受け入れて、言われていることを聞こうとすることも見られてきた。身体への働きかけに対してトレーニーはしっかり応えようとしている。

### (2) 訓練環境

出生直後から総合病院で、てんかんの投薬治療と PT,OT,ST の療法を受ける。4 歳の時キャンプに初めて参加した。6 歳で股関節脱臼の手術をする。7 歳で養護学校に入学する。10 歳の時、父親が仕事の忙しさと家庭への協力が薄れたこと、家を購入して経済的な負担が増え母親が仕事に就いたこと、子どもの側湾が進行して内臓への負担が気になりはじめたことで医療センターに入所し、別の養護学校に転校した。月例会には母親が朝施設に迎えに行き、参加している。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

初めて参加したキャンプで、参加の親は施設で一緒に親とは違った考えや生き方をもっていることに感心したが、キャンプの内容等は十分理解できなかった。その後2年間の参加はない。7歳の時よくなってほしいとの願いで月例会に参加し、キャンプにも再度参加する。ゆっくりながら座位がとれたり、指示に従って身体を動かすような変化が見られるようになった。10歳になって医療福祉センターに入所した。月例会の開始には間に合わず、2回目の訓練から出席することを2年間続けてきた。訓練環境の変化で効果が見られなくことがある。訓練環境検討会後訓練を続けることの大切さを痛感し、朝早く起きて月例会の1回目の訓練から参加している。体が大きくなり、それに伴い、歪みも大きくなってきているトレーニーには、月例会の訓練に加え、日々の生活における訓練の必要性を強く感じる。

## 11 トレーニー K (女児 インテーク時1歳10ヶ月、現在11歳4ヶ月)

診断名 脳性マヒ

動作・行動の特徴と訓練目標 首のすわりが不安定で、座位がとれない。緊張が強く勝手に力が入ってしまう。どの姿勢での姿勢がとれるようになるには、タテの方向に力を入れる学習が必要である。

### (1) 訓練経過

1) 動作の変化 3歳では、座位・膝立ちとも、腰が大きく引けてしまい補助が必要であった。立位は腰が引け、膝が伸びきって、踵を床に着けることができない。5歳で座位で腰を自分で入れ、手を使わずに自分で保持できるようになった。膝立ちは、腰に力が入ると抜けなかったが、少し弛められるようになった。補助に合わせて腰を入れられるようになって、わずかな補助で保持できるようになった。7歳の時股関節の力を弛める施術によって股関節は開きやすくなったものの、立位で右膝が開いて踏み締めにくくなった。

2) 情緒・行動の変化 母子分離の問題があって、親と離れると訓練中は泣くことが多い。分離不安を乗り越えることが親子の課題であった。6歳では頑張ろうとする気持ちがでてきた。親子訓練で母親がトレーナーになって訓練すると甘えて訓練にならないこともあったが、10歳以降は母親とでも訓練に取り組めるようになった。

### (2) 訓練環境

11ヶ月からリハビリテーションを始める。1歳半ころ脳性マヒと診断される。同じ時期から地域の母子通園施設に通いはじめ、動作法の訓練を受ける。3歳の時キャンプに初めて参加する。訓練ではほとんど泣いていた。4歳で保育園に入園する。5歳の時、身体のかたさから手術を勧められる。6歳で心の成長、衣服の着脱の練習を目標に医療福祉センターに単独入所する。再度手術を勧められる。7歳の時、保育園からの友だちとの関わりや刺激を重視して地元の小学校に入学する。7歳の時、県外で股関節の施術を行う。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

2歳から6歳までは座位・膝立ちの訓練を行い、5歳で座位姿勢が腕を使わずに自分で保持できるようになった。膝立ちは自分で腰を弛め補助で腰を動かし、少しの補助で姿勢を保持できるようになった。7歳の時に股関節の亜脱臼を指摘されたが、保護者は整形外科学的な手術をさけ、OTによる股関節の力を弛める訓練を受けた。9歳の時点では股関節は開きやすくなったものの、立位で右膝が開きすぎて踏み締めにくくなっている。座位で右腰が折れて前に出ることによって、右に凸の側湾が現れ上体がねじれて左腰が浮いてしまっている。また、膝立ちで背中を弛めて姿勢がとれるようになってきたが、左右の腰の動きの差が目立ち、立位では右膝だけでなく左膝も外側に開いてしまい、腰を入れて踏み

しめることが難しくなってきた。

## 12 トレーニー L (男児 インテーク時 3 歳 0 ヶ月, 現在 12 歳 2 ヶ月)

**診断名** 脳性マヒ

**動作・行動の特徴と訓練目標** 股関節と腰の緊張が強く、弛めることができない。坐位は保持できるが不安定である。膝立ちを自分で保持することはできない。

### (1) 訓練経過

1) **動作の変化** 4歳から6歳では坐位で躯幹と腰の他動的な弛めを中心に行った。最初は身体に力を入れて泣き、なかなか訓練課題に入れなかった。力比べになることもあったが、自分で弛めようとする動きが少しずつ見られるようになってきた。7歳から8歳は躯幹と腰の弛めを膝立ち姿勢で行った。姿勢をとると痛みを訴えることが多かったが、ブロックの強さを加減したり、トレーニーの動きを待つことで訴えは減った。徐々にではあるが自分で弛めようとするが増えてきた。7歳で股関節と両膝裏の手術を行った。術直後、股関節の開きは一時的によくなった。しかし肩・背・腰はかたく、腰は自分で弛めることができない。坐位は腰が引けるものの、直の姿勢に近い位置で腰を保持することができ安定した。膝立ちは腰を引き、背中が反る不安定な姿勢ではあるが保持していられるようになった。

2) **情緒・行動の変化** 7歳から8歳頃に訓練意欲が感じられるようになったが持続しなかった。また、母親は子どもの身体に対する関心が薄いように感じられた。その後トレーニーの訓練に対する意欲が徐々に高まっていった。訓練環境検討会後の11歳から母親の態度が激変し、子どもを受け入れ、家庭でも訓練をするようになって、子どもも自分の身体の動きに主体的に関わろうとするようになった。

### (2) 訓練環境

2歳から市の母子通園施設に通い、動作法の訓練を受ける。3歳から月例会に参加する。4歳から保育園に通園する。入会してから3年後の6歳のときに初めてキャンプに参加した。訓練会に対する親の意欲のなさや子どもの身体への意識の低さが不参加の理由である。7歳の時地域の小学校に入学する。8歳の時医療福祉センターに入所し、股関節、両膝の裏を整形外科学的な手術をする。以後クラッチ歩行になる。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

母親の訓練会への参加の意図が明確ではなく、また訓練に対する意識が低く人任せの感じが強かった。親の意識が伝わって、子どもは訓練会に嫌々くる。自分の身体を何とかしようとする意欲は感じられず、絶えず訓練から逃れようと力を入れて抵抗したり、痛い痛いと言ってその場を繕ったりした。自分で弛める訓練を行い始めた頃から少しずつ意欲をもって臨めるようになったが、主動感が持ちやすい訓練課題を行うことが意欲の向上につながった。加えて、11歳の訓練環境検討会後の母親の変化も訓練意欲の向上に強く影響したように思われる。それまでの母親は、「忙しくて」と言って家庭での訓練がままならなかったり、トレーニーの身体に対する関心が薄いように感じられた。7歳での手術直後は一時的に弛んだ。加齢に伴って次第にかたさが再現し、再度弛みにくくなって、自身でも動かす感じがつかみにくくなっているようだ。

## 13 トレーニー M (女児 インテーク時 4 歳 8 ヶ月, 現在 13 歳 1 ヶ月)

**診断名** 二分脊椎

**動作・行動の特徴と訓練目標** 自分で坐位、膝立ち、立位の姿勢をとることができる。坐位では直の姿勢がとれず、腹を出し、胸や肩を引き上げている。膝立ちも腰が引け、腹を出して胸、肩を引き上げバラ

ンスをとっている。立位では腰が入らず、膝が伸びないで踵が上がって足裏全体に体重をかけられず不安定である。しかし、脚を引きずりながら歩いている。情緒がきわめて不安定である。

### (1) 訓練経過

1) 動作の変化 5歳で膝立ちの課題を意識するようになった。7歳の時に立位姿勢で腰が入り、瞬間的だが自分で腰を立てられるようになった。8歳では膝立ちで左右の踏み締めや腰の出し入れを繰り返すことで、腰の動きがでて、立位でも腰や膝を伸ばそうとする動きがではじめた。その後、8歳の後半から9歳の前半の間は脚の骨折を気にしながら訓練をしければならなかった。9歳になると、坐位姿勢で背が曲る、腰が引ける、膝が流れて腰が引ける。立位では、屈の姿勢になって膝が曲る。12歳から13歳では自分の体を意識できるようになり、言葉や触れられることで歪みを修正できるようになっている。13歳でのキャンプ効果測定では、上体や腰、膝を伸ばし、足裏を付けて立っている。上体の緩めと腰入れをし、膝を伸ばし、足裏で踏み締める訓練を集中的に行った効果が見られる。

### 2) 情緒・行動の変化

幼稚園児だった頃は天真爛漫で、明るく活発、活動的で、好奇心も旺盛だった。6歳の時父親が死亡し、母親は落ち込み、いらいらしていることが多くなる。子どもはよい子でいなければという気持ちを持ち始めた。親の目を過度に気にした言動をとるようになり、母親が同伴している場面で質問されると親の顔色を伺ってなかなか返答ができない。情緒が不安定になり些細なことでめそめそしたり、トレーナーを噛んだりする等の問題行動が現われたりした。母子関係の緊張状態を改善するために母親にカウンセリングを勧め、また月例会の親の会でも検討した。子どもへの対応を客観的に見つめられるようになるにつれて、子どもの問題行動は徐々に減少し、訓練課題にも取り組めるようになった。

### (2) 訓練環境

医療福祉センターでの訓練を受け、松葉杖を使っての歩行訓練を中心に行った。5歳の時から月例会に参加して動作法による訓練を開始した。8歳(6ヶ月間入院)と10歳(4ヶ月間入院)の時、膝の曲がりを矯正するためにセンターに入院し、左右の膝の腱を延長する手術をした。

### (3) 訓練効果と訓練環境のかかわり

8歳と10歳で左脚膝裏と右脚裏の手術をした後は、訓練会に参加しても脚をかばっての訓練になり、訓練に集中できない状態であった。左の腰の入り難さ、左膝のかたさ、足首の変形は当初からあったが、上体の歪みが際だってきたのは9歳頃で、身体の成長も重なり、訓練に集中できない頃と重なっている。10歳の時は情緒の安定と意欲の回復が課題となった。一人で医療福祉センターへ入所したことが誘因となっているが、親子2人の母子家庭での両者が密着した生活の中で、母の過度の期待とそれに応えられない子への苛立ちや焦りが直接示されていたことが背景にあって子どもが不安定になっていったものと思われる。母親が自分の子どもへの対応を知り、子どもの気持ちを考えて接するようになり安定した。

### 参考文献

- 野口宗雄 2004a 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 1. 訓練会出席・参加と訓練効果の関連  
信州大学教育学部紀要 第112号 pp157-168
- 野口宗雄 2004b 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 2. 訓練環境の検討 信州大学教育学部  
紀要 第113号 pp121-132
- 野口宗雄 2004d 心理学的リハビリテーションによる障害児の長期訓練と訓練環境 4. 訓練環境の要因 信州大学教育学部  
紀要 第114号 印刷中
- 長野リハビリテーション心理学研究 2004 長野県心理リハビリテーション研究会 A4版 全129頁

(2004年12月15日 受理)